

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



### Vol.61 遅すぎた悟り

「して、主はタバコを止めたか？」  
恍惚とした闇に和尚の声が響く。  
「不思議なものです。」淀んだ時の流れの中で古川の声が木霊する。  
「生というものに対する、すぐる思いでしょうか？死というものに対する恐怖でしょうか？あの日、癌という裁定を下された日から私はパブロフの犬状態になりました。」  
「パブロフの犬？」  
「タバコを吸うと癌になる。癌になるのはいいが、癌になると痛い。痛いのはイヤ。即ち、タバコは痛いのでイヤというカスケードが一つ。タバコで癌になった。癌になったら死ぬ。死ぬのは怖い。癌という現実を突き付けられたからこそ説得力がでてきた、だからタバコは怖いというカスケード。この二つのカスケードが両頬に浴びせられたカウンターパンチのごとく、タバコ・ムリムリ！という極めて短いフレーズとなり私

の脳裏に植え付けられました。」

「面白いことを言うものよ。」

「タバコ　ムリムリが私の脳裏を木霊するようになると、不思議なものです。タバコを見ても吸いたいどころか目を背ける様になりました。」

「うむ。よう言うた！　して、主の肺癌の病期は？」

「Stage IV とされました。手術は無理なために、放射線治療と抗がん剤治療を続けています。」

「辛いのを。」

「爪の年輪が抗がん剤の治療回数を刻んでいるのです。私にとってはこれがある意味生きた証かと。」

古川が和尚に親指の爪を見せる。幾重にも重なる凹凸が、まるで年輪のように扇状に広がっている。

「一回抗がん剤を打つごとにこの扇の線が一つづつ増えていきます。」

別に後悔でもなく、恐怖でもなく、淡々と事実を伝える古川。

「ちょっと、あまりに惨過ぎるんとちゃうん。病気になるかもしれへんという知識を持ってタバコを吸うとったかもしれへんけど、これはあまりに惨い現実とちゃうん。」

御手洗があまりにも重く緊迫した空気に耐え切れず声を挟んだ。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一